

共学

# 近畿大学附属高等学校

近鉄の「大阪難波」駅から電車で東へ約二十分で、花園ラグビー競技場に着く。その少し手前の「八戸ノ里」の駅の辺りは、室町時代初期に河内国守護が「若江城」を築いたところだ。現在は東大阪の「町工場の街」になっている。世界中から働き手や研修生が集まるので、じつに多様な人々が住んでいる。

街の西側を占める近畿大学のキャンパスの一角に、同大学の附属高等学校がある。大阪市や奈良市からも一時間程度で通学できることもあり、高校生だけでも約二七〇〇人を擁する大規模校だ。

おもに近畿大学に進学する「進学コース」、国公立大学や難関大学を目指す「Super文理コース」／特進文理コース、帰国生や外国籍生徒が多い「英語特化コース」、そして附属中学からの「中高一貫コース」が設けられている。

野球・サッカー・ラグビー、そして水泳やアーチェリーなどでも日本を代表する選手が出るほどのスポーツが盛んだが、音楽・芸能関係のタレントとして活躍する卒業生も多い。

## IB<sup>※1</sup>のDP認定校に内定

二〇二二年にIBのDP認定校に内定され、本年度の一年生には

二年次より英語特化コースで日本語によるIB教育が実施される。

「IB教育室」の大川稔和先生はIB教育を大学院やオーストラリアの大学で学んできたそうだ。

「英語特化コース」は、授業スタイルが講義形式ではない点が特徴です。アクティブラーニングや課題解決型学習など、学習者主体の学びを前面に出していますので、二年生から『日本語DP』のカリキュラムに円滑に入っていけます」と大川先生。

「グローバル教育室」の古川英明先生も、「本校にはじつに多様な生徒が集まっています。英語の授業を英語のみで行ってはいませんが、英語特化コースでIBを選ぶ者、あるいは海外留学を目指す者は、グローバルレベルでのさらに高度な学びを要求されています」と胸を張る。

CEFR<sup>※2</sup>のB2レベルの英語力がある受験生は、「特技専願B入

試」が利用できる。日本人学校の中学生も、九月ごろまでに事前相談をして面接を受けておけば、二月の一般入試で特別な配慮を受けることが可能だ。

「もともと学力優秀な生徒が集まっていますから、帰国生のための特別な配慮というよりも、海外体験で養ったさまざまな能力、多様な価値観や社会情勢のなかで得た体験などを、この学校でさらに生かして磨いてもらえれば……いま海外にいる皆さんにも、ぜひ我が校のことを知っていただきたいのです」と古川先生は話す。

## 個々の生徒を見ている

同校には海外育ちや外国籍の生徒も多く、自由で開放的な雰囲気にも含まれている。見事なまでの「大らかさ」があるのは、医学部・薬学部から工学部、法学部、情報学部などまであらゆる領域をカバーする総合大学があることも大きいようだ。



グラウンドから見た校舎

※1: International Baccalaureate. 国際バカロレア。「日本語DP」は国際的な大学入学資格になる。  
※2: Common European Framework of Reference for Languages. 外国語の運用能力・熟達度を同一の基準で評価するグローバルスタンダードな指標。

所在地：〒578-0944 東大阪市若江西新町5-3-1

TEL：06-6722-1261 / Fax：06-6729-7385

URL：https://www.jsh.kindai.ac.jp/hs/

交通：近鉄大阪線「長瀬」駅から徒歩20分。また

は近鉄奈良線「八戸ノ里」駅から徒歩20分。

JRおおさか東線・近鉄大阪線「俊徳道」駅

と近鉄奈良線「八戸ノ里」駅から徒歩で大学直行バス。

生徒数：男子1,678人 女子1,071人

教職員数：専任127人（うち外国人1人）

非常勤74人

帰国生の特別選抜：「特技専願B入試」が利用できる。

※要事前相談

「卒業生の約七割が近畿大学に進学します。一定の進路保証があるというのは大きいですね。学園全体として『実学教育と人格の陶冶』を建学の精神に掲げ、『人に愛される人、信頼される人、尊敬される人の育成』を教育の目的としています」と古川先生。

他方で、国公立大学の合格率が高い点も驚きである。「生徒の学力の推移を的確に把握しています。データに基づいたきめ細かな指導をしますから、結果はおのずとついてくる感じですよ」というが、そ



英語の授業におけるグループワーク

## 多様性への対応力を強みに

これはIBの教育理念とも通底する。

英語特化コースの三人に話が聞けた。中一の夏からニュージラウンドに留学していたAさん(高二)はコロナ禍で帰国を余儀なくされたこの高校に入学したそうだ。

「英語だけでなく、濃い背景の多様な人たちが集まってきました(笑)。それに、他学年とのプロジェクト学習も多いし、学年の差がなくて、先輩とも仲がいいのもよかったです」と言う。

両親がケニア人で、小三までナ



インタビューに答えてくれた生徒たち

イロビで育ったBさんは、公立中学校を経てこの高校に進んだ。「中学のバスケット部の先輩が練習に誘ってくれて、雰囲気がいいなあと感じました。ケニアではずっと英語の教育を受けていたので安心でした。入学のとき『特別な支援はしないよ』と言われていたのに、授業中もことばの意味を丁寧に教えてくれたり、試験の解答を漢字で書けなくても正解になったり……いろいろ助けてもらえます」と話してくれた。

中学までは日本語が不自由だったと言うが、二年間で上達したらしい。見事な日本語だ。

両親共にベトナム出身のCさん

(高二)は、日本で生まれ、ずっと日本で育った。

「家から自転車です。十分なんです。中学までと違って、プレゼンテーションやグループ学習など生徒主体の授業があって、ほんとうに楽しいです。周りに町工場や農家があるので、地域のいろいろな課題にも気づくことができます」と話す。

コロナ禍でさまざまな制限があるものの、「夏休みの合宿や体育祭、文化祭もほんとうに盛り上がる」と三人は声をそろえた。大規模校なのに、先輩・後輩の壁がないのだそうだ。そのコロナ禍ももうじき終わる。

Aさんは将来、スポーツの世界で海外と日本とのかけ橋になるような仕事をしたいと言う。

Bさんは親に「理系の学部に行け」と言われ、勉強の多さに悩んでいる。Cさんはプログラミングのエンジニア職に就くため、近畿大学の情報学部を目指している。

それぞれが「社会に出るための準備をしている」と実感しながら高校生活を送っている姿は、見ていても心地よい。

(取材・文 小山和智)